

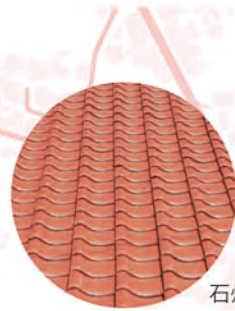
ごうつだいがく - これからの江津市庁舎計画提案 -

島根大学千代章一郎研究室

## 歴史

江戸時代の天領であった江津は本町にはじまり、幕末から明治期、そして昭和期にかけて様々な歴史を刻んできました。すでに中世には山陰道と考えられてきた街道沿いに様々な文化が蓄積され、瓦産業、石見神楽、あるいは商家や社寺仏閣が他にはない地域の拡がりをもたらしてきました。

吉阪隆正によって構想された市役所は、大正期の村役場とは異なり、橋梁のような構造体によって「市民のための」役所として広場をつくりだし、第二次世界大戦後の新しい価値を表現しようとしていました。江津市役所は江戸時代の本町を突き抜ける山陰道に匹敵する文化装置でもあったわけです。役所としての事務行政機能の役割を終えようとしているこの江津市庁舎は、純粋な文化装置として過去の遺産を引き継ぎ、また新しい文化を想像して蓄積する拠点となるはずです。



石州瓦



石見神楽

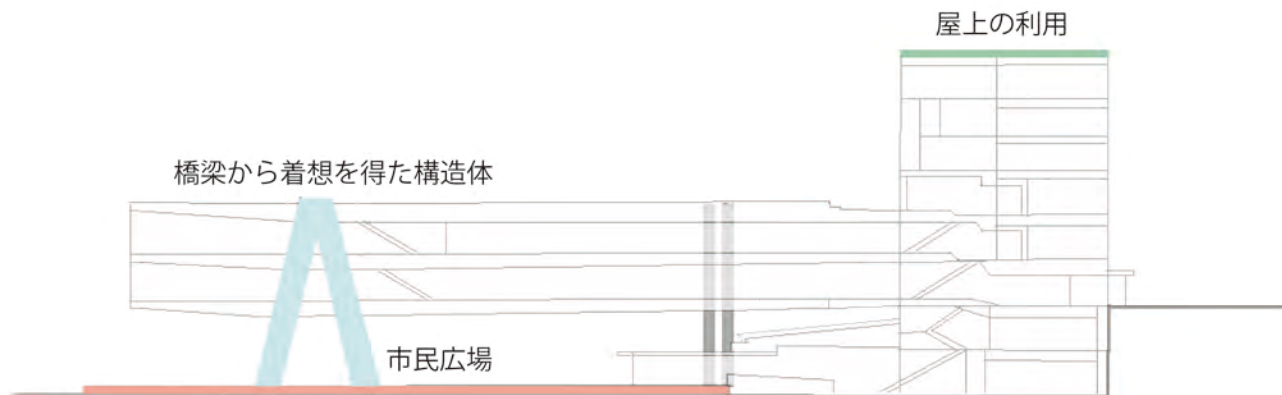


商家



山辺神社

## 吉阪隆正・U 研究室の構想



## 都市図





高校

新市街

保育園

ふれあいセンター

JR線

駅

山陰道の結節点

市民センター

市庁舎

新旧の架け橋

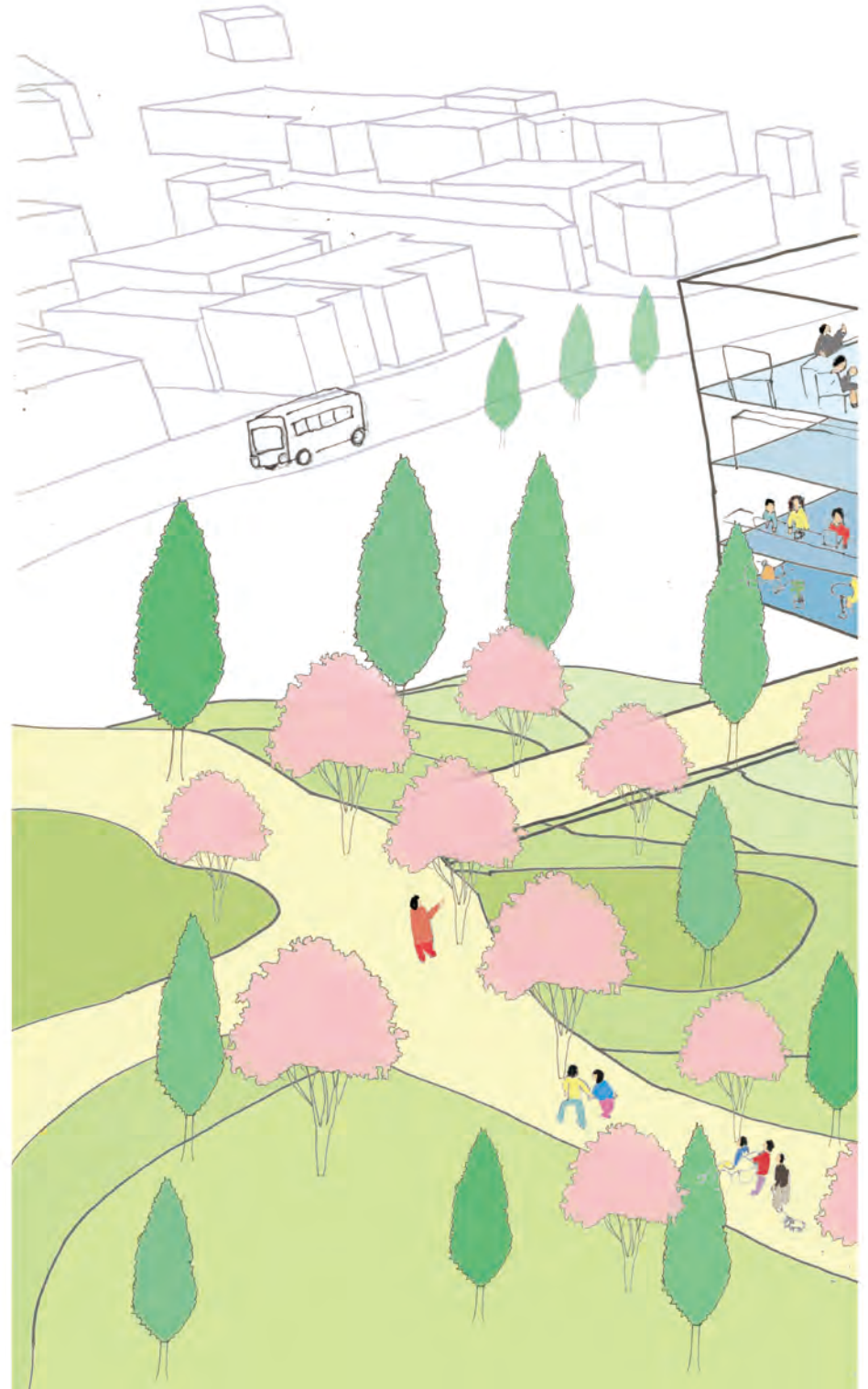
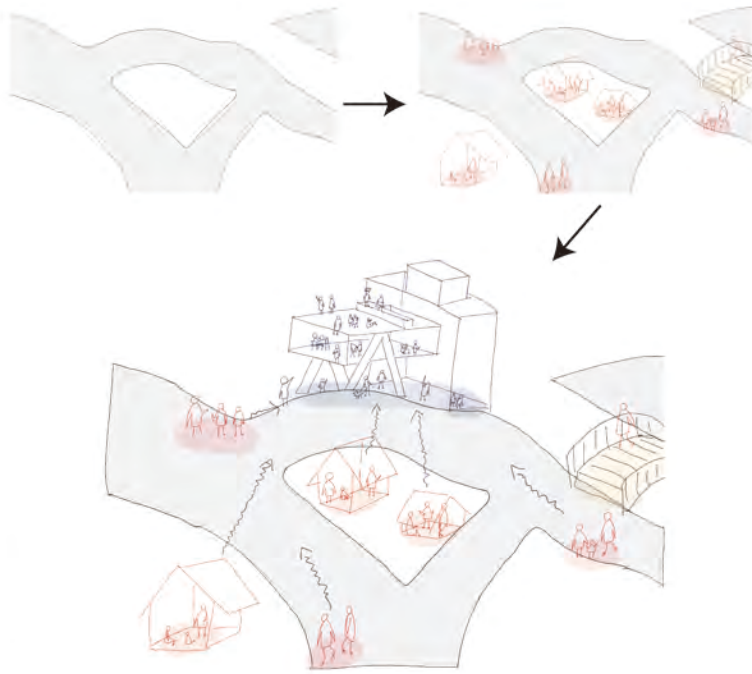
国道9号線

旧市街

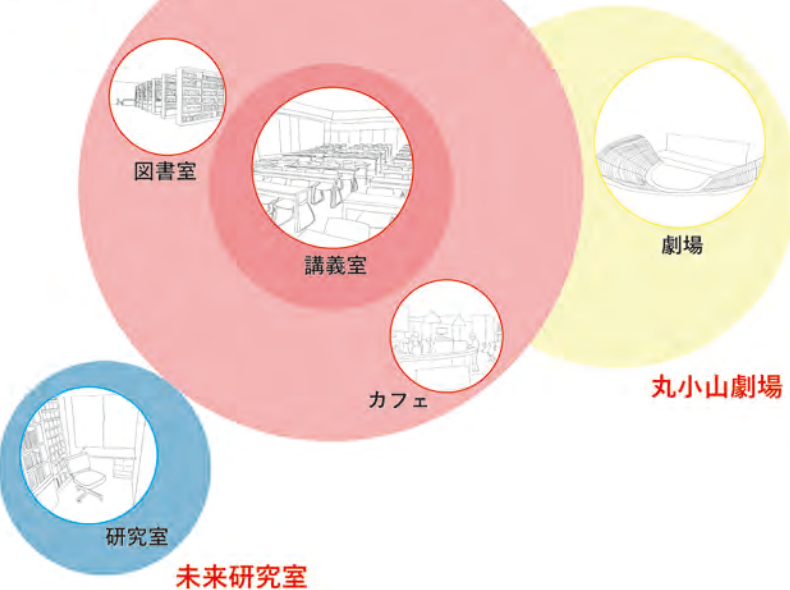
小学校

中世より新しい文化の芽生えは、西洋社会のなかでは大学において形成されました。町の一角の路上や既存の建物の一部を占有して「講義」が行われ、それらが徐々に集まってユニバーシティとなってきました。もともとはあくまで自治的な集合体であったと言われていました。同じ頃、日本では河原、橋のたもとあるいは町割の辻で阿弥号を称した新しい芸住家たちが中世以降の新しい文化を築いてきました。

偶然にも、吉阪隆正の考えた市庁舎は橋のようなかたちをしています。日本独特の新しい文化の種を巻く象徴的なかたちをしています。江津市の歴史文化を継承し、また新しくそれらを発信していく場所として相応しい潜在力が見出せます。歴史に習えば、今日では（阿弥号ならぬ）こどもから大人まで市民みんながつくっていく場所です。市民が自発的に、あるもので工夫しながらつくっていく江津民立の「ごうつだいがく」です。



### 空飛ぶ講義室



### 3つの場所

「講義」の場所として発生した大学は、なによりもまず人の声がこだまする場所でした。いろいろな情報を発信する「劇場」のようなものでした。それが「講義」として記録され、「本」として蓄積されることで図書室ができ、「研究室」ができ、さらに講義をはみ出して「カフェ」のようなものが備えられ、文化の智慧が蓄積され、継承されてきました。「ごうつだいがく」では、それらの機能を3つに集約します。

図書室

講義室

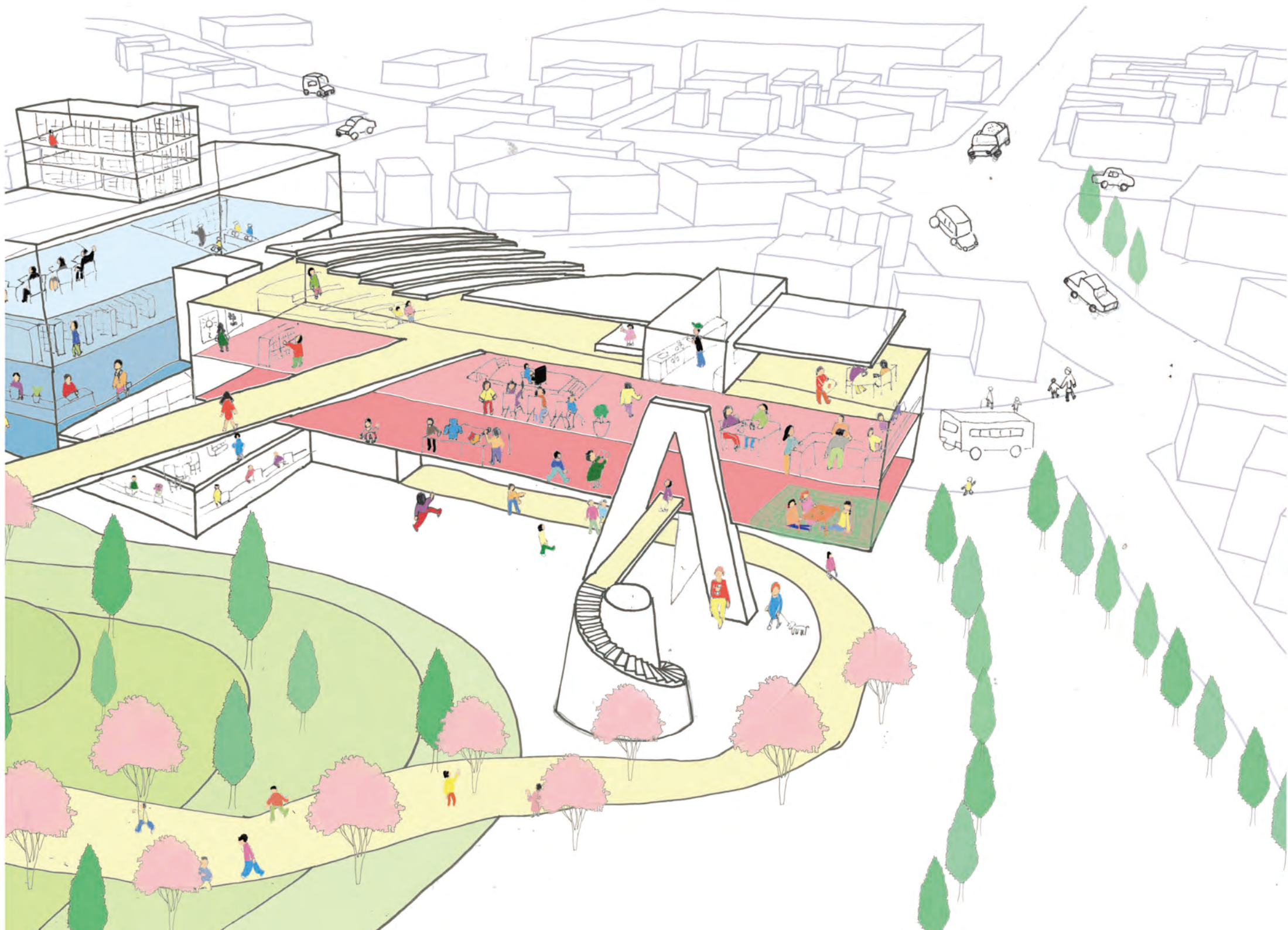
劇場

カフェ

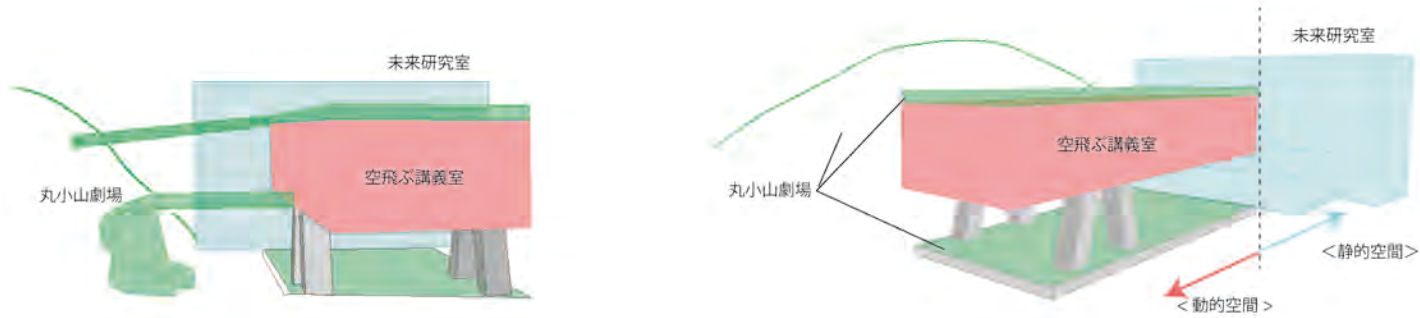
丸小山劇場

研究室

未来研究室



# ゾーニング



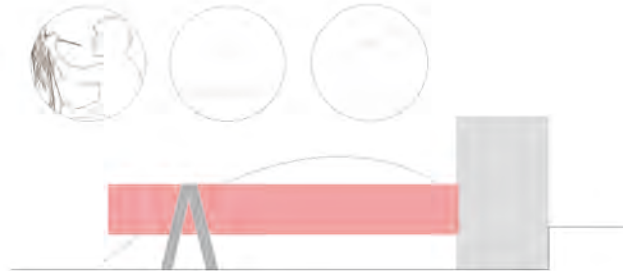
## 1. 丸小山劇場



市役所は隣接する丸子山公園を尊重して建設されましたが、それらの関係をさらに強化し、地上の「市民広場」と連動させ、さらにA棟の屋上階まで回遊性を持たせることによって、丸子山と一体となった野外劇場のよう

な場所となります。春には桜の名所として市民が集う場所として、現代に新しく復活させます。また、夏にはオープンシアターを開催することもできます。ここでは市民の自発的な企画が多様に展開することができます。

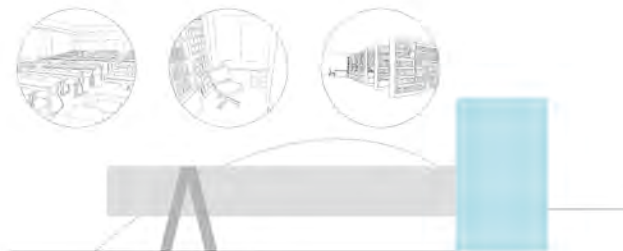
## 2. 浮かぶ講義室



A棟の地上と屋上に挟まれた2階3階部分には、室内劇場としての講義室があります。美術館や図書館は美術品や書籍を鑑賞閲覧する展示の場所ですが、講義室は書物や演劇、伝統芸能、現代芸術等の有形無形の文化を発表するための場所となります。大人から子どもまで、みんなが

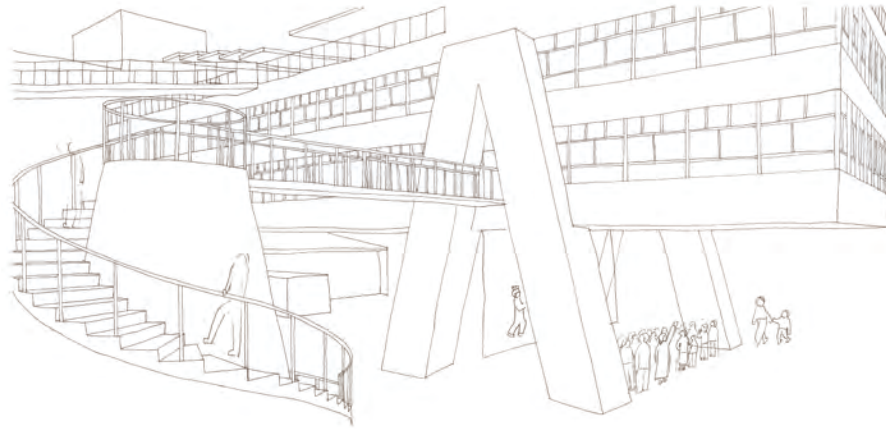
「教授」になることができます。内部のパーティションを撤去することによって、橋梁構造体によって獲得される浮かぶ講義室から江津の都市景観を眺め、図書館・美術館・博物館が渾然一体となった発表の場所市民自身の手でつくっていく場所となります。

## 3. 未来研究室



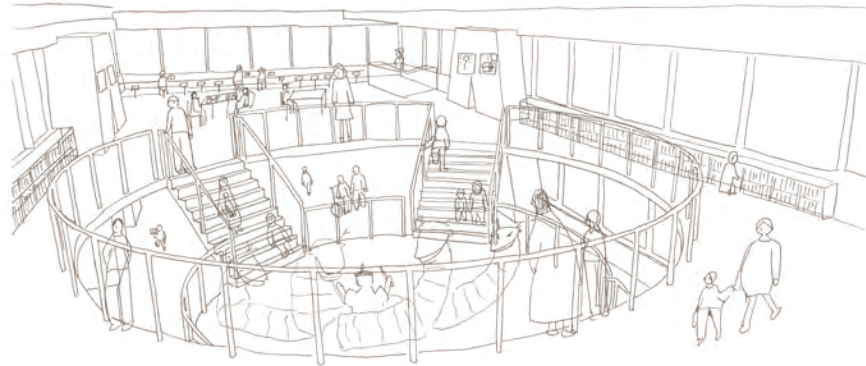
「こうつだいがく」は文化を継承して発信するだけでなく、新しい文化を生み出す種もつっていきます。市民から寄贈された図書を中心として、こどもの自習室、会議室、神楽のお稽古場所などから構成し、A棟の

講義室との賑わいとの対比で、B棟の研究室は未来の江津について考える静かな環境を提供します。市民から寄贈された書物が年々増えていき、B棟にはいろいろなところに書物の壁ができていきます。



### 丸小山劇場（ピロティ空間）

市民広場として生まれたピロティ空間は、様々なアクティビティ実現の可能性があります。石州瓦タイルに誘導されて丸小山への動線となりつつ、野外シアターなど地域住民が集える、吉阪隆正が元より実現したかった空間をつくります。



### 浮かぶ講義室（室内）

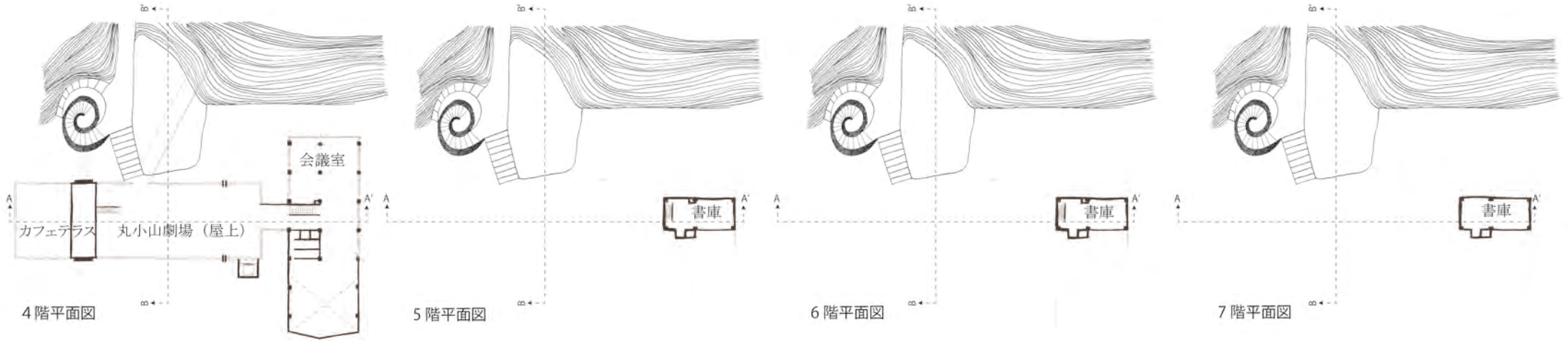
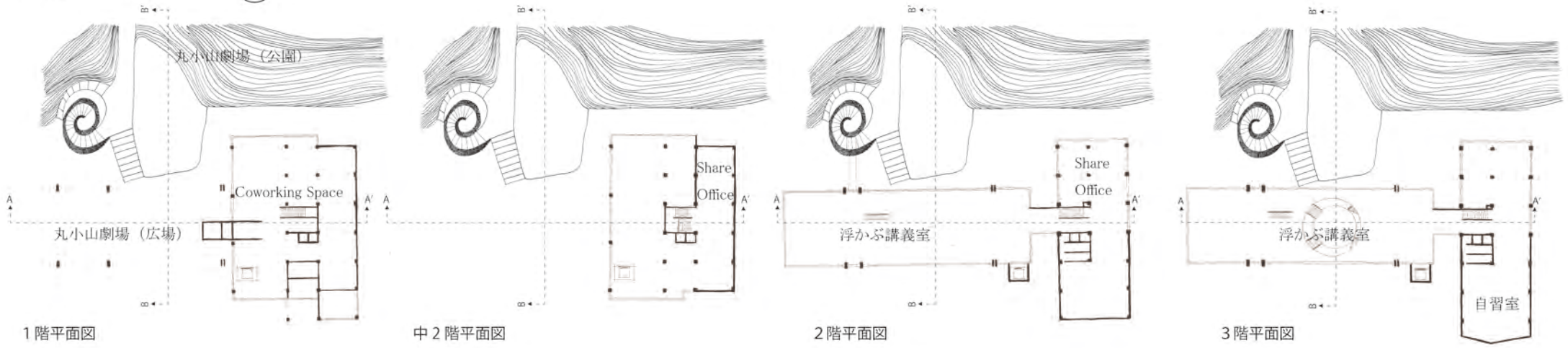
3階の中心部を階段のある吹抜とし、踊り場に舞台となり得る装置を設けます。日常では市民の動線として用いられますが、時に2・3階の全フロアがホールとなり市民の発表の場に変貌します。舞台からの音はホール中に響き渡り、講義室一帯を包み込みます。



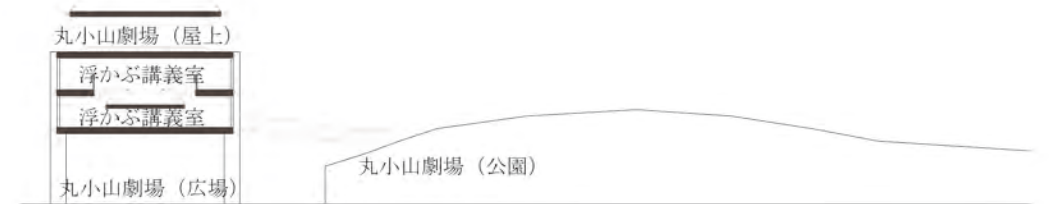
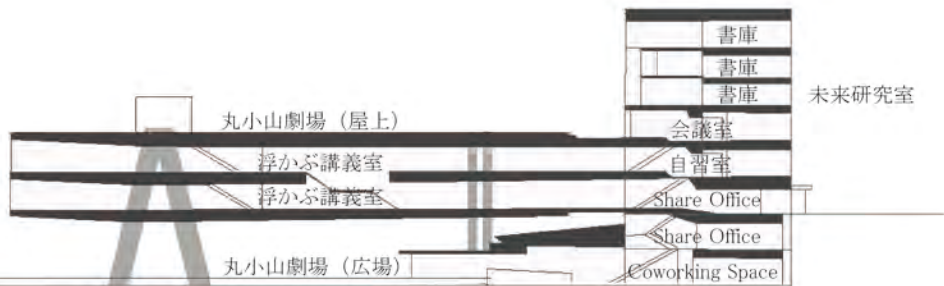
### 未来研究室（自習室）

議事堂として用いられていた空間は、子どもから大人まで利用することのできる自習室として生まれ変わります。自習室内には、市民が思い出の本を寄贈することのできる「おもいで本棚」を設置し、市民みんなで作っていく本棚に囲まれた中で知と触れ合うことができます。

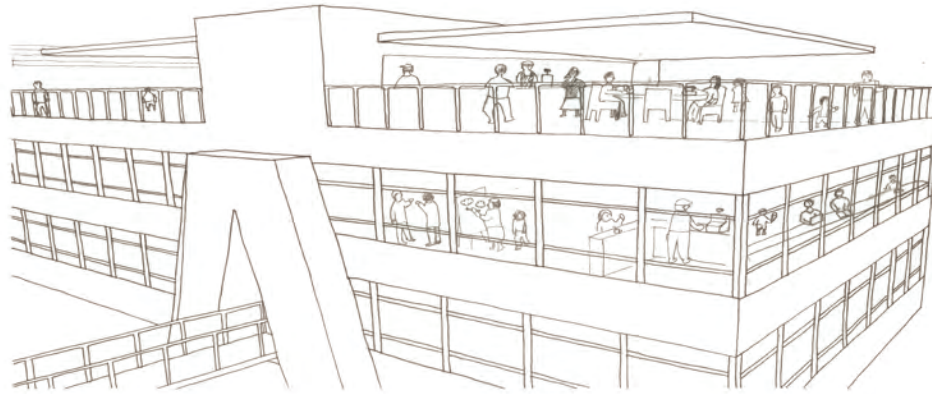
平面図 S=1:1000



断面図 S=1:500

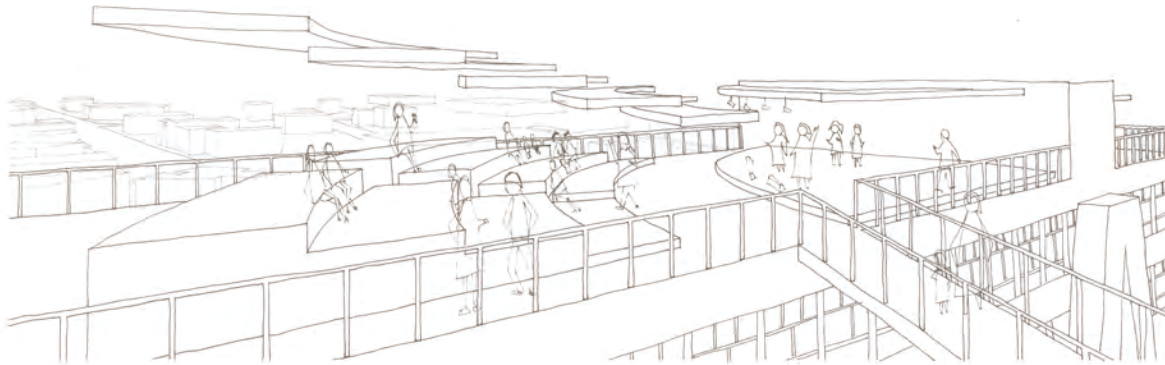






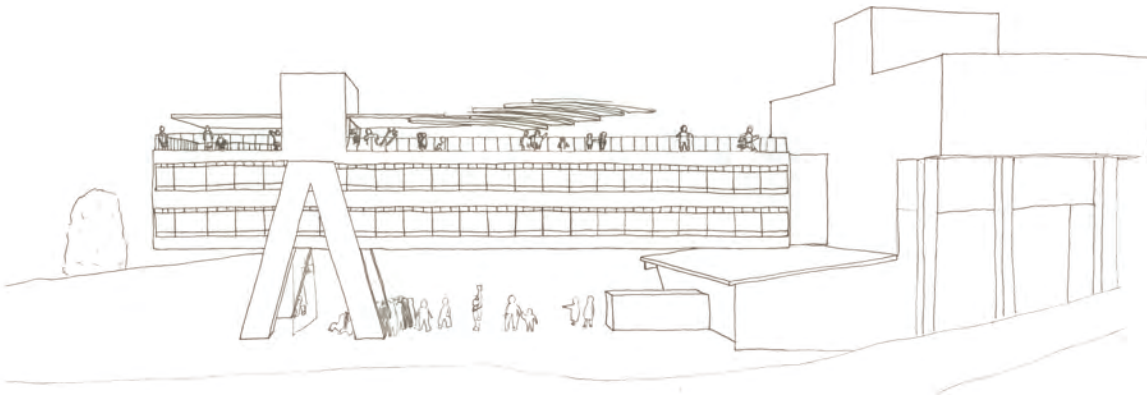
## カフェテラス

「浮かぶ講義室」先端につくられたテラスは二つの顔をもち、昼はカフェ、夜はビアガーデンとして一日中市民の憩いの場となります。江の川祭りの際は夜空に咲く美しい花火を特等席で観ることができます。



## 丸小山劇場（屋上）

丸小山から伸びたブリッジの先を建物内の階段へと導くようにつなぎ、建物内外で人の動線が切れないように、「道」としての屋上をつくりました。この道は両側に舞台と客席を設け、さくらに彩られた舞台につながる「花道」となります。



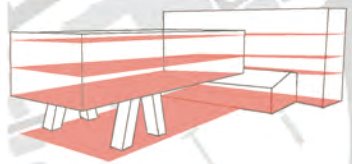
## 「ごうつだいがく」外観

「ごうつだいがく」として新しく生まれ変わった市庁舎は、吉阪隆正設計の赤いファサードを復活させつつ、今まで庁舎として蓄積されてきた市民の思いを引き継ぎ、ごうつ文化の発信のシンボルとしてまちの風景を作り出していくことでしょう。



床

葛の座



吉阪隆正の構想した江津市役所は、当時の新しい時代を象徴する典型的な近代建築として陸屋根のかたちとなりました。伝統的に日本の町並みは西洋のような建物の正面の顔（ファサード）ではなく、大きな屋根によって形成されました。石州瓦の景観の主役は屋根ですが、ここでは上下を反転して、屋内外の水平面をすべて石州敷瓦とし、「ごうつだいがく」の3つの場所を結びつけ、一つのまとまりのある文化の「座」を演出します。本町の葛街道から続く美しい伝統的な屋根の赤瓦景観は、ここで座して感じる美しい景観としてつながり、市民みんなの新しい文化の誇りを醸成します。

屋根

島根大学千代章一郎研究室

- 監修 千代章一郎
- 制作 古澤太晟
- 萩晋彦
- 小嶋優実
- 伊久夢乃
- 吉田孝生
- 水田日和